はやぶさより。

最初に声が聴こえたんだ。「おーい」って。だから僕は、できるのかわからなかったけど返事をしてみた。「なあに？」って。

「はやぶさ」っていうんだって、空に、その先に飛んでいく為に作られたんだって、みんなの言う事からわかったよ。僕は最初、小さくてバラバラな塊だったけどいろんなものをくっ付けたり繋げたりしてもらって「たんさき」になっていったんだ。
エンジンも、太陽光パネルも足も、寒さや暑さに負けない体も。そして、「おーい」って声に応えられる声も。
全部、みんなにつくってもらった。僕の体が完成に近づくと、僕はすごく嬉しくなった。カメラやテレビにぱしゃぱしゃ撮ってもらえるのが嬉しかったんじゃないよ。体が出来上がってくると、僕をつくってくれてるみんながそっとそばに来て（たいていはひとりでね）小さな声で「がんばれよ」とか「うまく飛ぶんだぞ」とか「かわいい子」とか僕を撫でながら言ってくれたんだ。それが嬉しかったんだ。みんなが僕に触ってた手のひらに、僕も反対側から手のひらを合わせてたよ。
僕は誇らしかった。みんなが、持ってる知恵をぜんぶ僕に注いでつくってくれたから。
軽くて丈夫なように。
ここから飛び立って、ちゃんとここに帰ってこられるように。
がんばろうとすごく思ったよ。みんなの為に。「イトカワ」の欠片をぜったい持って帰ってくるんだ！と思ったよ。でも、みんなと別れて行かなきゃいけないと思うと、そのことは寂しかった。

出発の日、何度も何度もいろんなところを確認してもらって、僕は飛び出した。ビュン！風を切って、速く。スピードをぐんぐんあげて、お日様に近づいてった。
お日様よりも高く上がって、もっと上がって、涼しかったのがだんだん熱くなってきた。大気圏。でも大丈夫。大丈夫なようにつくってもらったんだ。
熱い大気圏を過ぎると、また寒くなってきた。でもやっぱり大丈夫だったよ。ありがとう。

「イトカワ」を目指して飛んだよ。ひとりで飛んでたけど、ひとりじゃなかった。皆が地球から呼びかけてくれたんだ。「おーいはやぶさ、大丈夫か？あっちの方へ飛ぶんだよ」ってね。だから僕は安心してぐんぐん飛んでった。パネルの羽を太陽に向けて、ぜん

ぜん寒くなかった。

ずっとずっと飛び続けて、やっとずーっと先に小さく「イトカワ」が見えたとき、すごく嬉しかった。やったぜ！地球で、皆もすごく喜んだ。
ゆっくりゆっくり「イトカワ」に近づいて、そーっと「イトカワ」のごつごつした白い土の上に降りたんだ。その時だった。
強い風がゴォッと吹いて僕の体はグラッと揺れた。そしてななめに傾いたまま、僕は降りた。
どこかで「バキッ」という音がした。

イトカワの土の上にあるものを採ろうとカプセルを近づけたけど、うまく採れたのかどうだかわからなかった。「バキッ」のショックで僕は動けなくなり、しばらくイトカワの上でじっとしてた。ピンチだった。

もしかしてここから飛び立てなかったらどうしよう？僕ずっとここでくらすの？
悪い考えばかり思いついた。でも、地球から皆が僕が飛び立てるように命令してくれてたんだ。「飛べとべとべ、とべ！はやぶさ！とべ！」ってね。僕はそれをうまくキャッチしてシュウッと飛び立てた！よかった！帰れる！帰ろう！はやく！

でも帰ってる途中で、さっきの「バキッ」のせいか、皆の声が全然きこえなくなった。
そしてだんだん体の向きがおかしくなって、どっちへ飛んでるのかわからなくなってきた。
「ねえ！ねえ！おーい！返事してよー！」なんども皆を呼んだけど、何も聴こえなかった。
僕はまっ暗な中で、ひとりだった。

だんだんからだが冷たくなってきた。
「ねえ！……ねえ！……」寒くて、もう呼びかける事もできなくなってきた。

「……」何もきこえなくて　何も見えなかった。

「もう帰れないのかな。皆に会えないのかな。ごめんね。皆でがんばって僕を作ってくれたのに。ごめんね。」
僕はくらやみの中で、どっちが上か下か分からないままぐるぐる回ってた。
ひどく寒くて起きていられなくて、ずっと眠ってた。

ぐるぐる回ってたら、ちょっとだけ太陽にパネルが向く時もあって、その時は体が少し温かくなって起きて、僕は皆を呼んだ。「ねえ、ここに、いるよー」返事はなかった。

でも、皆にあいたかったから、帰りたかったから、目がさめた時は、呼んでみた。
「ここがどこか、おしえてよー」
「さみしいよー」　「かえりたいよー」
「ねえ……」
「ねえ……」
「ねえ…」　—「はやぶさ！」

「！！」「ここに！いるよ！ねえ！いるよ！僕だよ！」「はやぶさこっちだよ！こっちの方へ飛ぶんだ！」「わかった！飛ぶ！そっちに！」
ちょっとの時間だったけど、皆の声がきけた！！
僕が眠りながらときどき起きて皆を呼んでる時、皆が僕を探してくれてたんだ！ずっとずっと。ありがとうありがとう。
飛ぶ方向がわかったから、僕は力をふりしぼってそっちに飛んだ。でも起きていられる時間は短くて、体がすぐに冷たくなってきた。そしたら、皆が僕の羽を太陽にあてられるように、向きを変える信号を送ってくれたんだ。「これでいいのかな？どう？はやぶさ？」って。ちょっとずつちょっとずつ皆に向きを変えてもらって、体がぽかぽか温かくなってまた起きていられるようになった。何より皆の声が聴こえるのがすごく心強かった。
イトカワに降りたときの「バキッ」でエンジンもあちこち故障してたけど壊れてないエンジンをふかして、僕は地球へ飛んだ。
そのうち「プスンプスン…」ってエンジンが言った。壊れてなかったエンジンが壊れ始めた。
「え！動けなかったら帰れないよ！」「プスン…　」エンジンがとうとう全部停まってしまった。
僕は今度こそもう帰れないんだと思った。
「はやぶさ？」
「エンジン全部壊れちゃったみたい…もう、帰れないよね…」「……そうか。」

僕は、ゆっくり漂っていた。体はボロボロだった。カプセルにも何か入っているのかどうかも分からなかった。何も入っていないかもしれない。空っぽのカプセルを持って帰って

も、きっと誰も喜んでくれない。もう疲れた。もういいや…。

…でもあいたいなー皆に。やっぱり帰りたいなー。何も持ってないかもしれないけど、あいたいなー。ありがとうって、それからごめんねって言いたいなー……

「はやぶさ？エンジン、動くかもしれないよ。」「うそ！」「やってみよう！」「うん！」
ぼくのエンジンの、半分壊れて動かないのと、もう一つの半分壊れてやっぱり動かないのの、動く方の半分ずつだけで１こぶんのエンジンの力を出して、僕は動き出した。そんなことも出来るように作ってくれてたんだって。ありがとう！

１こぶんのエンジンの力でゆっくりゆっくり、僕は皆のいる地球へ向かって飛んだ。「こっちだよ」って教えてくれる声が、いつも僕を呼んでた。「はやぶさこっちだよ。あとちょっとだよ。」

あっちこっち傷だらけで痛くて、動かせるところは少ししかなくて、何も入ってないかもしれないカプセルを持って、でも帰りたくて、声のする方へ飛んだ。地球が小さく見えてきて、僕は力がちょっと抜けた。嬉しかった。本当に帰れるんだ。また会えるんだ。くるくる回る青い星へゆっくりゆっくり、残りひとつのエンジンで羽ばたいた。

近づいてくると日本が見えた。あそこに、皆がいる。僕が降りるのは日本じゃないけど、きっと降りたところにいる誰かが僕を皆のところへ運んでくれる。もしかしたら降りる場所に迎えに来てくれてたりして！嬉しい！やっとあえるよ！ただいま！ただいま！帰ってきたよ！

地球のすぐ近くで、また行く時と同じに体が熱くなってきた。日本も、他のところも

はっきり見える。雲も海も、山も見える。もうすぐだ！僕が降りるのは、えーと、どこだっけ？

あれ？羽が、燃えてる。
体がすごく熱い。
あれ？もしかして、帰れないのかな？出発してからずいぶん時間がたっちゃって、あちこちボロボロになっちゃって、僕はここで燃えちゃうのかな？だって火が、体中に。

あいたかったな、皆に。ありがとうって、ずっとずっと見捨てないで呼んでくれてありがとうって、言いたかったな。あのメガネの人とか、あのメガネの人とか、あのメガネじゃない人とか。ありがとう。ありがとう。カプセルは、大丈夫みたい。これが無事に届くといいな。もし何も入ってなかったらごめんね。途中で壊れちゃって遅くなっちゃってごめんね。いっぱいいっぱい、僕のために手を尽くしてくれてありがとう。
声をかけ続けてくれてありがとう。
僕をつくってくれてありがとう。
大好きだよ皆みんな。ありがとう。
カプセルちゃんと皆にとどきますように。さよなら。
ありがとう。